

所属・資格 史学科・教授

申請者氏名 加藤 直人

研究課題		清代文書資料に関する総合的研究
報告の概要	研究目的 および 研究概要	中国清代の文書は、基本的に漢語によるものと満洲語による二種類が存在する。清末において、話し言葉としての満洲語の使用が著しく低下したにもかかわらず、きわめて多数の満洲語文書が流通していた。本研究では、その時代の満洲語文書資料の特徴ならびにその存在意味について検討を加えることを目的とする。具体的には、北京にある中国第一歴史檔案館、台北の国立故宫博物院、またわが国の公益財団法人東洋文庫また天理大学図書館等に所蔵される清代文書資料をもとに、清末における満洲語文書のもつ意味について検討を加える。
	研究の 結果	平成30年度は、北京・中国第一歴史檔案館、台北・国立故宫博物院、そして我が国の東洋文庫等に所蔵される清代満洲語資料について検討を加えた。とくに東洋文庫に所蔵される「鑲紅旗満洲都統衙門檔案（以下「鑲紅旗檔」）」を対象として、総合的な考察を実施した。現在、東洋文庫研究部において行われている電子顕微鏡を利用した「紙質」研究に協力し、とくに「鑲紅旗檔」光緒朝檔案について予備的な研究を行った。また併せて清代文書資料における満洲語文書の重要性について、海外における清朝史研究の中心である中国人民大学清史研究所（大学院清史研究科）において、同研究所に所属する研究者ならびに学生に対し研究発表を行った。
	研究の 考察・ 反省	清代文書資料は、18世紀中葉以前の歴史研究において欠くべからざる存在となっているが、19世紀以降については、一部を除いてほとんど研究資料として用いられていないのが現状である。その理由としては、満洲語文書が、旗人ポスト（満缺）が赴任する辺疆、旗人関係官署、宮中の一部局に集中し、かつ主としてルーティンの業務報告に用いられていたことに起因していよう。これは世界の中国近現代史研究者のほとんどが満洲語文書を無視している点からも確認できる。しかしながら、反乱や暴動など突発事件の報告等ではなく、満洲語文書はルーティンの業務報告であるがゆえに、清朝治下の当該地域における日常社会を解明する貴重な情報となりうる。今後はより積極的に利用されねばならないであろう。
研究発表 学会名 発表テーマ 年月日/場所	研究会名 発表テーマ 年月日/場所	※この欄は、本報告書提出時点で判明している事項についてご記入ください。 加藤直人（単独）「清代的文献資料与満語」中国人民大学清史研究所創立40周年系列講座（2018年12月2日、中国・北京市、中国人民大学清史研究所）
研究成果物 テーマ 誌名 巻・号 発行年月日 発行所・者	研究会名 発表テーマ 年月日/場所	